

高校教科書の文学作品における一考察

一戦後の高校教科書教材における「漱石山脈」から一

池山 弘司

はじめに

高校国語教科書に採録された夏目漱石の作品は、今日では『ころ』が読解教材としてほぼ固定化している。しかしながら、時間軸を中心に作品・採録数・単元構成・学習の手引き・採録場面・作品解説から変遷を分析すると、漱石作品の教科書採録には大きな変動があったことが分かる（資料1）。

漱石作品や漱石の研究者、漱石門下による教材史については、『国語教科書の戦後史』（佐藤泉、平成18年5月15日）『漱石 片付かない〈近代〉』（佐藤泉、平成14年1月30日）、『中等学校国語科教材史研究』（橋本暢夫、平成14年7月30日）、『漱石と三人の読者』（石原千秋、平成14年10月20日）の研究があり、漱石の教科書教材について数々の指摘がなされている。

それらの論を踏まえ、改めて昭和二、三十年代に高校教科書に採録された漱石作品の採録状況を細かに観察すると、戦前からの『草枕』、戦後からの『三四郎』の採録が多いが、それら漱石作品の採録とともに「漱石作品」や「漱石自身」を解説する多くの文章も採録されているということに気付く。本稿では、戦後の漱石作品の教科書採録から、漱石作品とともに教科書に採録された「文学研究」的な文章や教科書編集の意図などを探り、漱石作品についてどのような「読み」のフレームがつけられたのか、さらに教科書からいかに「漱石像」が形成されていったのかという側面に触れつつ管見を述べたい。

1. 高校国語教材の『三四郎』の登場

資料1を参考にすると、戦後、高校教科書に最も早く採録された漱石作品は『三四郎』である。『三四郎』が初めて教科書に採録されたのは、昭和二十四年検定の教科書（成城、秀英）二社によるものであり、この年の採録を初めに多くの出版社が『三四郎』を掲載し始め、昭和三十二年の検定では七社が採録することとなる。

どのように教科書に組み入れられていたのか調査してみると、『三四郎』の高校教科書登場（昭和二十年代）に関して、初出の教科書では、その扱いは、単元構成によると「環境と自然」（秀英）であり、翌年は、「生活を描く」（新泉）というものであった。二十七年以降は三省堂教科書から近代文学作品として自然主義と別の立場に立つ小説として採録されていた。

また、その単元構成は、今日の教科書と比較すると作品解説的なつくりになっている傾向が見られる。『三四郎』を（あるいは漱石作品を）どのように読んでいくかということが、（文学史的な価値、漱石の人間性、作家の立場ということから）解説されているところに特徴がある。

例えば、昭和二十五年発行の「われわれの国語三」（秀英出版）では、『三四郎』は採録されていないが、漱石作品を解説する論が載せられている。昭和二、三十年代には、漱石の作品自体は教科書採録を見なくても、漱石自身について、また、漱石作品に関する記述、研究者による漱石論が教科書に採録される傾向がある。

当時の雑誌、座談会の記録による発言※1を踏まえて考えれば、国語の授業では専ら古典の読解が中心であったということである。小説教材には、まだ「詳細な読解」といった読みのフレームが形成されていない段階での意見と読み取れ、小説教材が生徒の「読書」に任せられていたということも多かったのではないかと想像できる。また、この頃の教科書の作品解説的なつくりは、生徒が自主的に読むということに都合がよかったとも言える。

『三四郎』が教科書に採録されたことについて当時の国語指導者側からの多くの意見が見られるが、それら意見から共通して読みとれる当時の小説教材としての見方は、「生徒が自分で教科書を読んで分かる内容」「教師がわざわざ授業で取り扱うほどの内容ではない」というニュアンス※2である。

また、小説教材を扱う場合、文学史についてだけ授業でレクチャーするという当時の高校教師の意見※3も見ることができる。

教科書教材に漱石作品のみならず漱石の研究者による解説・作品が多く存在していたという事実から、「人間漱石の価値」「作家論」などの影響力も浮かび上がってくる。

2. 漱石の文学研究の状況から

漱石研究史を踏まえると、昭和二十年代に伊藤整（『現代日本小説体系』昭和二十四年河出書房）、片岡良一（『三四郎』解説、昭和二十五年春陽堂文庫）による研究がその後の『三四郎』研究を盛んにし、「青春」「自我」「近代人の自己形成」などという視点から作品の価値に影響を与えていることが分かる。この

『三四郎』研究のダイナミズムが教科書の編纂に影響していたとも考えられる。

教科書の中の解説等からも、「青春」「近代人の自己形成」という作品の読み方が伝わる『三四郎』は、教科書に切り取られた場面が、ほとんど「三四郎が上京して、都会の風景に驚く場面」からということ踏まえれば、上京した田舎育ちの青年の目に映る初めての都会、その後様々な世界を見て成長する青年「三四郎」の視点を強調する採録の仕方と言える。

一方、資料2を見ると、『三四郎』が最も多く教科書に採録された昭和三十二年、恋愛や友情などをテーマにした作品が『三四郎』7、『たけくらべ』6、と突出しており、また、『暗夜行路』3、『桜の実の熟する時』3、『田舎教師』3、『浮き雲』3、『舞姫』3、『走れメロス』2、などもそれに続く採録頻度である。また、採録数は少ないが、内容面から上記作品と同種のものとして見逃せないのが、『こころ』1、『伊豆の踊子』1、『春琴抄』1、『友情』1、である。

(これらの作品の中で、戦後初の高校教科書採録となった作品は、『桜の実の熟する時』『舞姫』『走れメロス』『こころ』『春琴抄』『友情』である。)

この採録状況からすれば、「(明治の)青春」や「友情」「恋愛」が教材としての認識を高めたことは見逃せない事実であろう。このように、『三四郎』が教材として教科書に採録された背景には「青春」「友情」「恋愛」を扱おうとする戦後の教科書採録の一つの傾向があったと考えられる。

3. 漱石の研究者あるいは弟子たちの教科書教材への影響

『三四郎』の教科書採録が始まった時期(昭和二、三十年代)には、漱石の研究者による教材の採録が多く観察できるが、漱石の研究者による教科書教材(作品解説・評論)、漱石門下の論がどのように教科書に採録されたのか調査してみる(資料3)。昭和三十年代までに、漱石研究の著者となった人物で、かつ教科書に文章が採録されている人は、三十四名数えることができる。

赤木桁平・阿部次郎・阿部知二・阿倍能成・荒正人・生田長江・猪野謙二・内田百閒・江藤淳・岡崎義恵・片岡良一・亀井勝一郎・唐木順三・川副国基・小宮豊隆・塩田良平・清水幾太郎・瀬沼茂樹・辰野隆・寺田寅彦・中勘助・中野好夫・中村光夫・成瀬正勝・長谷川泉・平野謙・福田清人・藤村作・本間久雄・三好行雄・山本健吉・湯地孝・吉田精一・和辻哲郎(あいうえお順)がそうであるが、上記研究者たちの教科書採録作品を個々に調査すると、評論、随筆、文学研究論文、文学史解説、文学作品解説など、教科書に採録された内容は多種多様であり、必ずしも漱石について述べたものとは限らない。しかし、よく内容を吟味すると漱石像を形成する力が浮かび上がる。

大きく教科書教材の内容を分類すると、上記三十四人の教科書教材から、漱

石関連の内容について以下のような特徴を認めることができる。

- (1) 文学以外の分野から漱石を論じた教材
- (2) 文学関連の分野から「自然主義文学」の衰退を論じた教材
- (3) 自然主義と漱石とを論じた教材
- (4) 漱石の人物像・作品・思想について焦点をあてた教材
- (5) 教科書著作者による「漱石像」

この(1)～(5)の特徴について、具体的に教科書の内容を検証してみたい。

(1) 文学以外の分野から漱石を論じた教材

漱石研究者・門下の教科書採録作品は、文学と別のジャンル(科学・哲学・社会など)に関わる著作も多い。この採録状況は、漱石の門下にいた人たちや研究者が、それぞれ文学以外の分野においても活躍していることを示すが、それら採録作品の全体からすると、数はわずかながら著者と漱石とが強く結びついている内容を見つけることができる。

例えば、阿部能成は、漱石と身近に接していたときの漱石への思慕や敬愛、また「則天去私」「エゴイズム」ということを掘り下げて論じ、漱石の思想に「汎神論的」宗教観の存在を論じ、晩年の漱石の思想についての論を展開する。※4

次に、寺田寅彦の教科書採録作品を観察すると、「科学者と芸術家」※5で、科学者と芸術家の共通点について、「創作」ということを論じ、芸術家の立場に夏目漱石を出している。

また、清水幾太郎の教科書教材※6は、漱石の思想・見識から「自己本位」「個人」について西洋と日本を比較し、漱石の思想と結びつく近代市民社会の在り方についての論である。

瀬沼茂樹の教材では、評論の本質を追究する論が見られ、そこでは漱石の「文学論」「文芸批評」また、漱石の思想が引用され、漱石の評論が独創・創作であり、「評論文学」とする指摘が見られる。※7

このように、文学以外の分野から、漱石に関する捉え方を教科書教材から認めることができる。

(2) 文学関連の分野から「自然主義文学」の衰退を論じた教材

次に、先の漱石研究者・門下による教科書教材で、文学関連の随筆・評論・解説などの著作(文学史観)が、教科書採録されている傾向は確かに強いが、漱石について直接的な言及がないものの自然主義文学の衰退や欠陥ということを論点にしている教材が多く認められることもこの時期の特徴と言える。

例えば、赤木桁平の教科書採録作品※8は、「遊蕩文学の撲滅」(大正五年刊)から自然主義文学の衰退を論じたもので、永井荷風・谷崎潤一郎らを名指しし、

「自然主義が開いた個人主義の上に立ってはいるが、現実から逃避して瞬間的な享樂を追い、気分、情趣を楽しもうとする文学であつた。」とする内容で、「遊蕩文学」に対して「荒色耽酒」主情的、頹廢的であるとした内容である。

阿部次郎の教科書採録作品は、『三太郎の日記』から芸術家の態度について、「現実を如実に映出すること一記憶と同様の意味において、現在の状態を写真にとっておくことのみをもって満足することができない。よりよく生きんとする意志を欠く時、彼は表現の努力を支持するに足る内面的緊張さえも保つことができないであろう。」と、現実を映し出すことから超越した努力ということを述べている。※9

同様に、中野好夫の教科書採録作品※10では、十二頁にわたって「写実」と「文学」との論が見られる。そこでは、リアリズム（写実主義）という問題について「決して単なる『模倣』や『模写』だけではない。根底においては、作家のかく見る、かくありたいという、何かもっと積極的な、意欲的なものの表現が文学だろう」とあり、「その意欲的なものは、手放しに出されるべきものでなく、それを強く抑制しようとする客観的態度と、内側からの意欲的なものとの抵抗の美しさの中にほんとうの文学が生まれる」と述べる。

また、中村光夫の論（『風俗小説論』による）が十五頁にわたって採録されている教科書※11があるが、この教材も自然主義から私小説への展開の中で、自然主義文学の価値を時代の流れとともに認めた上で、その欠陥を「大正期の文学のほとんど異常なほど急速な開花ともろかった凋落とは、ちょうどしんの腐ったりんごが早く色づくのに似た『蒲団』の内面の論理の発展と、その隠れた弱点の露呈の過程」ととらえ、この「欠陥」「弱点」ということについて、中村武羅夫の言葉を引用し、「書かれてあることよりも、だれが書いたのかということのほうに、主として意識の力点が置かれているような小説」ということの問題点をあげている。そしてそのことが読者層を「作者をよく知っている文壇通の読者」にし、また、「私小説は小説の仮構性を排斥した結果、その社会性をも喪失してしまった」ことを指摘している。

以上のような文学史観の教材は、漱石についての具体的な記述はない。しかし、漱石の作家としての態度や作品の傾向（「拵えもの」とされて自然主義と別の立場にあったこと）を婉曲的に肯定する内容としても読み取れる。つまり、写実・自然主義文学とその延長線上にある文学作品に対して「衰退・凋落・欠陥」という文学史観から近代文学を眺めた場合、それと別の立場に立っているのが、漱石であるということにもなる。

（3）自然主義と漱石とを論じた教材

片岡良一については、著書『自然主義研究』（昭和三十二年筑摩書房）におい

て自然主義が、「浪漫主義との奇妙な混交において成立してきた」こと、また、「大正文学にとって最も主要な観点は、新しい人間形成への努力と空しさ」とを、見いだされるのでなければなるまいとし「それが主として夏目漱石を起点として流れ出している」という文学史観を述べるが、その観点は教科書にも影響している。例えば、『三四郎』が採録されている同じ単元（「近代の文学」）※12の中で近代文学作品の読みの方法として参考になるように片岡の論は単元構成されているが、そこでは、「作家の生きた時代がどのような時代であったか」、「作家がどのように生きたか」、ということが作品の価値を決定すると述べ、そこからその作品なり作家なりへの正しい判断と評価とを引き出す、「そのような読み方こそが必要なのだと思います。」と時代背景・作家研究の重要性を説いた論が加えられている。

湯地孝の教材※13では、「現代文学」は、「ある意味で苦悶の文学」であり、「前期においては低回趣味に浸った漱石も、後には近代人が持つ利己心を鋭利に解剖し、峻烈な自己批判をなした。」と述べ、また、別の教科書※14では「近代の思潮は自我の覚醒にその源を発し」自然主義をして「われとは何ぞや」と叫ばせた動向は、また、「等しく当代の他の文学にもうかざれるので、たゞ前者においてはそれが露骨に現れているに対し、後者においてはそれが内部に潜入していった」と自然主義文学と漱石との関係を示唆する内容が教科書に採録されている。

本間久雄による教科書教材※15では、自然主義文学と余裕派の文学についてそれぞれ視点の違いや作品の違いを分析した上で、「作品を鑑賞する場合には、自然主義は自然主義として、余裕派は余裕派として、同等の価値を持っている」と述べる。

このように教科書に採録された文学史観を個々に観察すると自然主義と余裕派との違いを述べ、双方に価値を認める研究者がいる一方、漱石の「文豪」としての位置を強く推し進める論もある。例えば、猪野謙二の教科書採録作品「鷗外と漱石」※16は、時代背景（自然主義との関わりも含めて）や作家の生き方から作品へ導く解説になっているが、そこでは自然主義文学の作家と鷗外・漱石との比較や解説をした上で、「いなか者の自然主義者達が夢の中の西洋＝近代に憧れていたにすぎない」のに対して、鷗外・漱石は留学経験から「ほんとうの近代を知っていた」「近代社会の悪いところをよく理解していた」という視点で「文豪」の「卓越化」の図式※17があることを述べている。

（4）漱石の人物像・作品・思想について焦点をあてた教材

漱石の「文豪」としての立場を強く推し進めようとする論は他にも教科書に採録される。自然主義文学との関係にとらわれずに、漱石自身や漱石作品に焦

点を絞って論じた教科書教材も見ることができる。例えば、中村光夫による「漱石について」という論（『作家の青春』昭和二十七年創文社）が十頁にわたって採録されている。※18 漱石作品教材『それから』の次に置かれた教材である。この文章では漱石がいかにか生きていたということについて、漱石の内面が生涯を通じて孤独な独創の中で戦っていたという点、漱石が内的にあらゆる局面で危機の深淵に臨んでいたからこそ、そこに漱石の実生活を辿る価値があるということが述べられている。昭和二、三十年代に盛んに行われていた「人間漱石」の研究ということと強く結びついていると考えることができるが、この中村の論は、作家の思想・実生活を考証する価値ということに結びつく内容であり、教材として扱われた場合、高校生にとっては漱石作品を読む一つの指針となり、文学研究（「作家論」）のありかたが国語の授業の中で、大きな影響を持っていたと言えるのではないかな。

作家漱石の内面を深く追求する態度を「読み」に生かそうとする教材は他にもある。小宮豊隆著作の教科書教材はその典型である。小宮の教科書採録作品は全て漱石に関する記述があり、また深く作家漱石の内面に踏み込んだ論証にもなっている。※19 小宮による教科書教材は、小宮自身による漱石研究であり、読んで楽しむ読書活動とは次元の異なる独自の（漱石賛美とも言えるが）掘り下げた論である。これが、当時の高校生にそのまま伝われば、人間漱石の価値、作品の価値、「読み」について大きく影響を与えていたことが考えられる。このように漱石作品の採録の他に「漱石像」「漱石文学」の価値を形成し、漱石作品の読みの方向性に力を入れる教材が採録されているが、このことは教科書採録作品という切り口からだけではなく、教科書著作者からの影響力も認めることができる。

（5）教科書著作者による「漱石像」への影響

教科書著作者による影響力として特筆すべきは、岡崎義恵による教科書への影響力である。研究者として、また日本書院の国語教科書の編纂者として長く活動し、漱石の芸術を積極的に肯定していると読みとれる内容が多数見られる。日本書院の教科書から漱石の解説を見ると、「日本における近代文芸の出発点」、「東洋的な教養を高い西洋的な知性でみがきあげ」、ついに「則天去私」という東洋的な世界に回帰した漱石が、近代文芸の大きな支柱の一本であった※20 こと、また、「自然主義の主流に漱石は、むしろ対立の立場」ととったこと、そして、「近代人の心の奥に潜む利己主義や自我主義を深刻にえぐり出していった」こと※21 が書かれ、漱石の影響力が日本の近代文化を形造った人々に及んでいた点、そして「その影響は深く広がった。平野のように広がる自然文芸に対して、漱石の文芸は孤峰ではなく、一つの雄大な山脈を思わせる。人呼ん

でこれを『漱石山脈』というのもおもしろい。」※22など、日本書院の教科書には漱石に関する記述が多く、また漱石、漱石作品について価値を述べていることが分かる。

4. 教科書に採録された「研究者の作品」の背景にあるもの

文学研究の方面から漱石の作家論の状況を確認していくと、「漱石研究者による教科書教材」は当時（昭和二十年代から三十年代）の「作家論」の発展の状況と一致していることが分かる。また文学研究の状況として、「戦後」の「人間回復」といった一つの方向性を見ることが出来る。戦後の「民主化」、「自由と独立」のため、漱石に近代生成の一典型を見いだそうという力が働いていたことが漱石研究史から分かる。そして、それは高等学校の教材についても求められていたことだったのではないか。

文学研究で人間性の回復を目指していたという当時の漱石研究の動向は多くの作家論から読みとることができ、それと並行して昭和二十年代から三十年代の教科書で述べられていた「個人主義」「自我」「近代人の苦悩」「東洋と西洋」という読みのフレームはこの時期に固まりつつあった。

「個人主義」「自我」というテーマは戦前の教科書には見られず、また、昭和四十年代には学習指導要領の改訂によって「文学研究」という教科書教材は少なくなり、急激に漱石研究者の教科書作品は減少する（資料3）。とすると、漱石をめぐる「個人主義」「自我」「近代人の苦悩」「東洋と西洋」はこの時代特有の傾向であり、戦後という時代の要求が教科書採録へと結びついたのではあるまいか。

戦後、新しい社会・時代を創造していかなければならないという状況、また、米国による占領から新しい価値観や制度を否応なしに目の当たりにしなくてはならなかった人々が多くいたはずである。そのような時代の中で新しい時代を創造していくという人間のありかたがどのようなものであるのか。生徒達に何を伝えるべきなのか模索しながら、漱石作品や人間漱石の生き方を教材として生かしていたということも考えられる。

以上は、漱石作品『三四郎』の教科書教材と漱石研究者や漱石門下と称される人々による教材について、時代背景から、それら文章が教科書に採録される際に働いたと思われる力学について解き明かそうという試みであった。そしてそこからは「漱石神話」とも言うべき、特定の人々によるイデオロギー形成の跡を読み取ることができるとともに、その力学には、戦後という時代の要求、すなわち戦後の新しい時代を築く生徒達の人間形成に資するようという文学

教材の方向性、言い換えるなら文学教材の読みのフレームを認めることができた。漱石作品や人間漱石、さらにはそれをめぐる種々の言説は、その中心にあって大きな働きをしていたものと言ってよいだろう。

5. おわりに

さてその後、漱石作品の教材化には、いろいろな変遷が見られるが、冒頭で触れたように今日では、高校国語教科書としては『こころ』の一場面にはほぼ固定化されている。資料1から分かるように、それは昭和50年代後半（1980年代前半）から進み、今日に至っている。その背景には、共通一次試験の開始や、科目構成の変更などが影響していたものと思われる。昭和50年代には、文章論の研究成果が高校国語教育にも持ち込まれ、それを背景とした読解指導が盛んに行われており、科目構成も、国語Ⅰ、国語Ⅱ、現代文などと改編されたことで、各学年の中心となる読解教材が求められるようになった。

そうした中であって、かつては文学とは何か、人間とは何かを問うこと、しかもそれは生徒の自学を中心に読み取っていくことが前提であった漱石作品等が、教室で詳細に読み解くべき対象へと読みのフレームが変わっていったと考えられる。そのフレームの変更により、漱石作品は『三四郎』から、読解の焦点のより分かり易い、またテーマも収斂させやすい『こころ』の一場面が中心になっていったものと考えられる。

そう考えると、今日固定化して、その教材価値が当たり前のように感じられている教科書の『こころ』も、高校の国語科教育が、何を目指そうとするかによって、その価値を減ずることもないとは言えない。

教育が、社会的にも制度的にも大きな曲がり角に来ていると思われる今日、漱石作品をめぐる読みのフレームをあぶり出す作業は、読みの教育というものが、単にフレームに支えられ支配されていた行為に過ぎないという事実を露呈させるだけでなく、新しい時代を見据えて新しいフレーム作りや教材開発の必要性も示唆するものと思われる。十分に論じ切れたとは言えないが、本稿の意図がそのようなところにあったことを確認して稿を閉じたい。

註

※1 「解釈と鑑賞」昭和二十九年二月号、座談会「来るべき入試の現代文をめぐって」における意見。

※2 「文学」昭和二十七年八月岩波「教科書に関する雑感覚え書き」三好達治。

※3 「解釈と鑑賞」昭和二十九年二月号、座談会「来るべき入試の現代文をめぐって」における意見。

- ※4 「現代文新抄全」(清水書院昭和三十三年発行)「一、夏目先生の追憶」。
- ※5 初出は「現代文要選」(日栄社昭和31年発行)の「一四、科学者と芸術家」。
- ※6 「高等学校国語総合三上」(昇龍堂昭和二十九年発行)「四、論文」。
- ※7 「国語三高等学校用」(教育図書昭和三十年発行)「四、評論」「一、評論の方法」。
- ※8 初出は(数研昭和三十三年発行)高国A-1007。
- ※9 初出は(三省堂昭和三十三年発行)高国1126。
- ※10 「高等国語三訂版」(三省堂昭和三十一年発行)「3長編小説」「二近代小説について」。
- ※11 「国語総合三下」(昇龍堂昭和二十九年発行)「九文芸思潮」「(二)近代リアリズムの展開」。
- ※12 初出は「言語と文学上」(秀英出版昭和二十七年検定済)「四近代の文学」。
- ※13 「総合新選国語二上」昭和二十七年中等教育研究会。
- ※14 「高等国語三上」(昭和二十八年大修館)「近代の文学」。
- ※15 「高等学校第二学年用新国語二(下)」(中等教育研究会昭和二十六年検定済)「七、小説」。
- ※16 「高等学校新国語総合二」(三省堂昭和三十三年発行)単元「Ⅱ 鷗外と漱石」。
- ※17 『漱石 片付かない〈近代〉』佐藤泉(2002・1・30日本放送出版協会)で指摘がある。
- ※18 「高等学校国語総合二改訂版」(中央図書出版昭和三十四年発行)「近代の小説」。
- ※19 初出は「新国語文学二」(三省堂昭和二六年発行)「V長編小説」「二、三四郎」〔解説〕 国語二高等学校用総合(日本書院昭和32年検定済)「九、漱石」『『坊っちゃん』について』 「高等学校新国語二総合」(續文堂昭和三十三年発行)「一、読書の楽しみ」「漱石と読書」など。
- ※20 「国語二高等学校用総合」(日本書院昭和30年発行)「九、漱石」。
- ※21 「国語三高等学校用総合」(日本書院昭和30年発行)「二、知性と文芸」
- ※22 「現代国語一」(日本書院昭和三十八年発行)「八、近代の小説」。

付記

本稿は、2004年度横浜国立大学大学院教育学研究科へ提出した修士論文の一部に、加筆・修正をしてまとめたものである。

高木まさき先生、府川源一郎先生、他にも数多くのご指導いただいた先生方に感謝いたします。

資料1 夏目漱石作品、作品別採録頻度

阿武泉氏の『高校国語教科書』教材リスト(平成16年版横浜国大府川研究室蔵)を参考にした。

(同じ年度に同じ出版社によって複数の教科書が発行されているものもカウントする。)

教科書発行年	教科書発行年	近代文学掲載教科書掲載数	近代文学採録教科書数	『三四郎』	『いろ』	『草枕』	『虞美人草』	『それから』	『野分』	『文鳥』	『坊ちゃん』	『道草』	『明暗』	『夢十夜』	『吾輩は猫である』	『永日小品』	『薙露行』
1950	S25	42	18	2													
1951	26	31	19	1													
1952	27	93	27	1		2								1			
1953	28	110	39	4		4			1						1		
1954	29	27	9			4											
1955	30	78	23	3					1								
1956	31	85	27	1		3	1		1								
1957	32	208	51	7	1	6	1	1									
1958	33	85	17	2		4			1								
1959	34	60	16	1		3											
1960	35	84	19	2		5		1									
1961	36	0	0														
1962	37	17	3	1													
1963	38	82	20	3		4											
1964	39	62	15	2	1			1							1		
1965	40	71	19	1	1			1					1		1		
1966	41	0	0														
1967	42	114	29	3	1	4									1		
1968	43	76	17	1	1	1		1					1				
1969	44	7	2		1												
1970	45	47	13	1		4											
1971	46	59	14		1			1									
1972	47	50	11	1	2								1				

教科書発行年	教科書発行年	近代文学掲載 教科書掲載数	近代文学採録 教科書数	『三四郎』	『いづる』	『草枕』	『虞美人草』	『それから』	『野分』	『文鳥』	『坊ちゃん』	『道草』	『明暗』	『夢十夜』	『吾輩は猫である』	『永日小品』	『薙露行』
1973	48	91	24	2	3	5											
1974	49	46	11		4			3									
1975	50	70	15	2		1		2				1		1			1
1976	51	71	17			3											
1977	52	101	20	2	7			2									
1978	53	73	14	1	3			1									
1979	54	71	12											1			
1980	55	66	12		4			2									
1981	56	62	12	1	3			1						1			
1982	57	85	18	1		1								1			
1983	58	164	30		14			2		1				1		1	
1984	59	20	4	1													
1985	60	89	19	1		1											
1986	61	169	29		15			3		1				1		1	
1987	62	45	6	1							1						
1988	63	94	19			1								2			
1989	H1	169	29		13			3		2				2			
1990	2	63	8	1							1			1			
1991	3	105	21			1								2			
1992	4	167	30		12			2		2				3			
1993	5	30	4	1													
1994	6	125	26														
1995	7	219	41		25			2						1	1		
1996	8	84	12	2		1								1	1		
1997	9	1	1														
1998	10	128	27											1			
1999	11	212	40		32			1									
2000	12	69	9	2											1		

資料 2 昭和三十二年発行教科書に採録された小説教材一覧

□の作品は、この年に初の高校教科書採録となったもの

阿武泉氏の『高校国語教科書』教材リスト(平成16年版横浜国大府川研究室蔵)を参考にした。

作家名	作品名	採録数
夏目漱石	三四郎	7
夏目漱石	草枕 [採菊東籬下]	6
樋口一葉	たけくらべ	6
森鷗外	安井夫人	5
幸田露伴	五重塔	5
木下順二	夕鶴	5
W・シェクスピア/市川三喜・松浦嘉一	ハムレット	4
ゲーテ/久保栄	ファウスト	4
芥川龍之介	鼻	4
島崎藤村	夜明け前	4
横光利一	旅愁	4
志賀直哉	暗夜行路 [追憶]	3
木下恵介 原作：壺井栄	シナリオ 二十四の瞳	3
ギート・モーパッサン/河盛好蔵	ジュール伯父 [ジュールおじ]	3
芥川龍之介	羅生門 [羅生門の引剥]	3
泉鏡花	高野聖	3
谷崎潤一郎	細雪	3
島崎藤村	桜の実の熟する時	3
志賀直哉	城の崎にて	3
田山花袋	田舎教師	3
二葉亭四迷	浮雲	3
森鷗外	舞姫	3
W・シェクスピア/坪内逍遙	ヴェニスの商人	2
W・シェクスピア/中野好夫	ジュリアス・シーザー	2
真船豊	なだれ	2
谷崎潤一郎	吉野葛 [吉野くず]	2
イワン・C. ツルゲーネフ/二葉亭四迷	獵人日記 [かばの林の中]	2

作家名	作品名	採録数
森鷗外	阿部一族	2
島崎藤村	家	2
森鷗外	寒山拾得	2
大仏次郎	帰郷	2
芥川龍之介	戯作三昧	2
川端康成	禽獣 [菊戴]	2
葛西善蔵	子をつれて	2
有島武郎	小さき者へ	2
武者小路実篤	人間万歳	2
ギー・ト・モーパッサン / 川口篤	水の上	2
島木健作	生活の探求	2
太宰治	走れメロス	2
坪内逍遙	当世書生気質 [書生気質]	2
菊池寛	父帰る	2
国木田独歩	忘れえぬ人々 [琵琶湖]	2
志賀直哉	和解	2
アグスト・M・ガルス / 神西清	アッタレーア・プリンケプス	1
島崎藤村	嵐	1
水品春樹	ある日の宮沢賢治	1
アルカイ・トルストイ / 中村白葉	アンナ・カレーニナ [貝がら雲]	1
ゲーテ / 茅野蕭々	ヴェルテルの悩み	1
有島武郎	生れ出づる悩み [岩内の少年]	1
内村直也	えり子とともに [グラジオラス]	1
志賀直哉	沓掛にて	1
夏目漱石	こころ [先生とわたくし]	1
井伏鱒二	山椒魚 [さんしょう魚]	1
島木健作	ジガ蜂	1
ロマン・ロラン / 片山敏彦	ジャン・クリストフ	1
ロマン・ロラン / 豊島与志雄	ジャン・クリストフ [姉と弟]	1
井伏鱒二	ジョン万次郎漂流記	1
岡本かの子	すし	1
佐藤春夫	スペイン犬の家	1

作家名	作品名	採録数
夏目漱石	それから	1
芥川龍之介	たばこと悪魔	1
中島敦	弟子	1
ゲルテ・セゲアテス／永田寛定	ドン＝キホーテ	1
ジャック・ティボー／西條鉄石／誌夫	バイオリンは語る [初舞台]	1
井伏鱒二	へんろう宿	1
志賀直哉	ほりばたの住まい	1
川端康成	山の音 [父]	1
ワントン・アヴァング／高垣松雄	リップ・ヴァン・ウインクル	1
中島敦	李陵	1
ウィリアム・シャーヤン／倉橋健	わが心高原に	1
川端康成	伊豆の踊り子	1
三好十郎	炎の人	1
J・M・シグ／松村みね子	海に行く騎者	1
J・M・シグ／山本修二	海へのりゆく人々	1
志賀直哉	灰色の月	1
横光利一	機械	1
佐藤春夫	丘	1
坪内逍遙	桐一葉 [長柄堤]	1
尾崎紅葉	金色夜叉 [塩原]	1
国木田独歩	源おぢ	1
芥川龍之介	枯野抄	1
森鷗外	高瀬舟	1
志賀直哉	濠端の住まい	1
中島敦	山月記	1
芥川龍之介	山鳴	1
内村直也 原作：森本薫	時間について	1
村上元三	自由を護った人	1
森鷗外	渋江抽斎	1
志賀直哉	出来事	1
谷崎潤一郎	春琴抄	1
岩田九郎	春風馬堤曲	1

作家名	作品名	採録数
芥川龍之介	雛	1
ライナー・マリー・リルケ／大山定一	声	1
ヘルマン・ヘッセ／片山敏彦	青春は美し	1
アレクセイ・トルストイ／米川正夫	戦争と平和	1
内村直也	足音	1
樋口一葉	大つごもり	1
岡本かの子	葛の門	1
長谷川四郎	鶴	1
	電報	1
長塚節	土	1
森本薫	怒涛	1
ハンス・ラント／森鷗外	冬の王	1
尾崎紅葉	二人比丘尼色懺悔	1
幸田露伴	二日物語 [長谷まうで]	1
野田高梧・小津安二郎	麦秋	1
魯迅／竹内好	非攻	1
イワン・C. ツルゲーネフ／米川正夫	父と子	1
アルフォンソ・ドーデー／桜田佐	風車小屋	1
志賀直哉	焚火	1
トーマス・マン／関泰祐・望月市恵	魔の山	1
中島敦	名人伝	1
武者小路実篤	友情	1
梶井基次郎	路上	1
池田忠雄 原作：山本有三	路傍の石	1
老舎／竹中伸	駱駝祥子	1

資料3 昭和三十年代までに漱石の主要研究において研究書・論文の著者となった人物であり、かつ教科書に著書が採録されている教材の頻度一覧

□は、教科書の中で漱石についての記述を含む内容

同じ年に複数の作品が採録されている場合、()の中の数値が漱石に関係する内容のもの。

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
発行年	教科書	赤木桁平	阿部知二	阿部次郎	阿部能成	荒正人	生田長江	猪野謙二	内田百閒	江藤淳	岡崎義恵	片岡良一	亀井勝一郎	唐木順三	川副国基	小宮豊隆
1950	S25				2						1					
1951	26				2											
1952	27		1	3	4						2	1				1
1953	28		5	2	4						1	1	2			
1954	29			1												
1955	30		3	2	1						1		3	1		3
1956	31		2	2	2		1				3		2(1)			
1957	32	2	6	4	3(1)			1			3		10(3)			
1958	33	1	1		2			1			3(1)		5	1		2
1959	34		3	1	1						1		2			
1960	35		1					1					3(1)			
1961	36															
1962	37										1		1			2
1963	38					1						1	5	1	1	
1964	39							1	2				3	1		1
1965	40		1		1			1			1				1	
1966	41															
1967	42					2				1		1	4	2	1	
1968	43		1								1		4		1	
1969	44															
1970	45											1	2		1	
1971	46												2			
1972	47												2	1	1	
1973	48		2							1			6	2	1	

阿武泉氏の『高校国語教科書』教材リスト(平成16年版横浜国大府川研究室蔵)を参考にした。

16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
塩田良平	清水幾太郎	瀬沼茂樹	辰野隆	寺田寅彦	中勘助	中野好夫	中村光夫	成瀬正勝	長谷川泉	平野謙	福田清人	藤村作	本間久雄	三好行雄	山本健吉	湯地孝	吉田精一	和辻哲朗
	1			2														
	2		1	3													1	1
1	2			4	1	1	2						1			1	3(1)	4
	2		3(1)	6		3										1		4
				2									2				1	1
1	1(1)	1		5	1	2	2				1						2	4
3(1)	1	1	4(2)	4	1	1	5				1				2		6(1)	2
4(3)	6	1	3	13(1)	1		7	1				1	1		2	1	9	10
			2	5	1		5			1					3		4(1)	7
	1	2(1)	2(1)	3(1)	1	1	4				1				2		4(1)	2
1	2	3	2	5(1)			4(1)	2(1)			1				1		1	2
				1			1										1	1
	2	3		6		2	3		1		1				3		4	1
1	2	3		6(1)		2	4		1		2				3		1	2
1	3	1	1	1			2	1	1		1			1	3		2(1)	6
1	5	2		7(1)		2	1		3		1				3		3	2
1	1	1	1	1			3	1	1					1	1		2	4
																		2
	2	1		3		1	2		2						2		1	1
1	2			3(1)		1			1						1		2	
1		1	1				2	1	1						1			3
	1	2		1			2		1						1		1	2

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
発行年	教科書	赤木桁平	阿部知二	阿部次郎	阿部能成	荒正人	生田長江	猪野謙二	内田百閒	江藤淳	岡崎義恵	片岡良一	亀井勝一郎	唐木順三	川副国基	小宮豊隆
1974	49													4		
1975	50		1	1						2			2	3(1)		
1976	51		1							1			3	4	1	
1977	52												1	5		
1978	53			1						1				1		
1979	54									1			1	4	1	
1980	55			1									1	4		
1981	56			1						1				1		
1982	57												1	3		
1983	58								1				3	3		
1984	59													1		
1985	60												1	1		
1986	61								1				3	3		
1987	62													1		
1988	63												1	1		
1989	H1			1									2	1		
1990	2															
1991	3													1		
1992	4			1									2			
1993	5															
1994	6													1		
1995	7													1		
1996	8															
1997	9															
1998	10													1		
1999	11													1		
2000	12															

16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34
塩田良平	清水幾太郎	瀬沼茂樹	辰野隆	寺田寅彦	中勘助	中野好夫	中村光夫	成瀬正勝	長谷川泉	平野謙	福田清人	藤村作	本間久雄	三好行雄	山本健吉	湯地孝	吉田精一	和辻哲朗
	2						2								1		1	1
				1		1	1								1		1	1
	1			3		1	2		1					1			1	1
	2						3							1	2		1	
				2			3(1)							1			1	2
	1			2		1	2		1								1	
	1						3								2		1	
				2			3(1)		1						1		1	1
	2			2		1	3							1			2	1
		1		3			3								4			2
							1											1
				3		1	3							1	1		2	1
				1			3								3			1
				1			1								1			1
				1			3				1			1	2		2	1
				1			3								4			1
				1			3								1			2
				1		1	2				1				1			1
				1			3								3			1
				1			1								1			2
				2														1
				2			1								1			1
				2		1	1								2			3
				3														1
				1		1	4											2
						1	1								1			1